OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	慈円の和歌と思想
Author(s)	山本, 一
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/27653
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 14 】

氏名	山本（やまもと） 一（はじめ）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 15063 号
学位授与年月日	平成12年2月3日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**慈円の和歌と思想**
論文審査委員	（主査） 教授 伊井 春樹 （副査） 教授 後藤 昭雄　教授 平 雅行

論文内容の要旨

慈円は、関白忠通を父に持ち、関白兼実の弟、後京極摂政良経の叔父、自らは天台座主にあるなど、政界と法界とを結ぶ実力者として重要な地位を占めていた。兼実・良経没後は九条家の中心的存在となり、後鳥羽院の信任も厚かったものの、親幕派の慈円としては、院の討幕（承久の変）計画では、院と対立する立場をとることになり、歴史の「道理」によって武家政治の正統性を説いていさめようとしたのが、歴史書の『愚管抄』だとされる。和歌は六条家の清輔、御子左家の俊成に学び、多くの百首歌を詠み、歌会・歌合に出詠し、『新古今集』には西行に次いで92首の入首歌数を示し、私家集の『拾玉集』や、そのほか残された歌も加えると6000余首存するという。そのような慈円の和歌作品について、平安末期から鎌倉初期の厳しい政治的な状況や、当時の仏教界を視野に入れながら、体系的に考察したのが本論文の内容である。

論文の構成は、序章に「『拾玉集』の伝本をめぐる覚書」として、以下考察していく上での本文の位置づけをし、ついで「建久期までの和歌活動」として第一章から第七章、「新古今期後鳥羽院歌壇と慈円」として第八章から第十章、「承元・建暦・建保・承久期の和歌活動」として第十一章から第十五章、「『愚管抄』とその周辺」として第十六章から第十九章までを配し、400字詰原稿用紙にするとおよそ1,000枚を越える大部なものとなっている。

慈円は十三歳で出家、建久三年(1192)に三十八歳で天台座主に任ぜられ、後鳥羽院の護持僧としても仕えることになる。ただ彼は、仏教の世界にだけ身をゆだねることは許されず、九条家の一員として活動せざるを得なくなるが、申請者はその時期の和歌活動について論じていく。とりわけ慈円の歌の特色とされる「速詠」について、「厭離百首」「住吉百首」等の分析によって、宗教的な心情の表現化であるとする。後鳥羽院歌壇における慈円の項では、『拾玉集』巻四に所収される、歌会・歌合の草稿や詠草とその後の推敲による歌とのかかわり、「古今歌百首」の序文・跋文、さらに新古今集の慈円歌の考察をする。慈円の五十余から六十余歳の、承元から承久期にかけては、彼の特徴的な和歌観がもっともよく見られる時期といえるようで、「万象の表現としての和歌」の理念のもとに、多様な百首歌作品が詠み出されていった様相を、具体的な作品に即して論を展開する。最後にまとめられた『愚管抄』とのかかわりでは、慈円の仏道修行という精神的な活動と政治的な立場、『平家物語』成立への関与、彼の歴史観についても明らかにして

いる。

論文審査の結果の要旨

慈円については、後鳥羽院とのかかわりや新古今集前後の歌人として注目されながらも、従来は比較的歴史や思想史的な立場からの考察が主流を占め、どうしても文学研究は従属的になりがちであった。その原因としては、歴史的な変動期に、仏教と政治とに身を置き、ともに影響力を持ち続け、しかも歴史書『愚管抄』の著者という特異な存在であったことによる。さらに和歌の立場からすると、詠作の多さもさることながら、家集『拾玉集』の本文研究の遅れも起因しているであろう。ただ、近年になって『拾玉集』の本文への関心の高まりにより、かなり整理されるとともに、新古今集の成立背景、良経や定家、後鳥羽院、西行等の研究の進展にともない、相対的に慈円の和歌活動も新たな視点から照射されるようになってきた。申請者は、その慈円の和歌研究を推進した主要な一人でもあり、本論文は歴史や思想を基底にしながらも、和歌詠作のありようや作品の読みを本格的に体系化した内容となっている。

本論文の評価としては、文献学的な先行研究を継承しながらも、独自の位置づけをして本文批判をするとともに、政治や仏教思想とのかかわりによる和歌作品の成立、和歌そのものの詳細な分析、同時代の歌人としての位置づけなどをしたことにある。隠遁願望がありながらも、政治の世界とかかわらざるを得なくなった慈円の存在、それにともなう「速詠」の意義づけ、『拾玉集』の資料を用いての新古今期歌壇の活動状況、数々の百首歌の成立への新たな視点、『愚管抄』のより具体的な歴史観の指摘など、これまでにない歌人慈円像を構築し得たと思う。ただ、歴史や仏教思想の視点からの慈円研究としては追求不足は否めなく、また独自の説を展開するため、ややもすると本文解釈に強引さが見られないわけではない。

以上、問題点や今後の課題は含まれるものの、慈円の文学者しとての本格的な研究としてはすぐれた成果と評すべきで、中世和歌文学研究への影響は大きなものがあろう。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。